



新活
書園

東海記後篇

五

ル 3
475
7



東遊記後編卷之五

多取川の風雪

南谿子著

門心 3
494

西石
上田仙吉
四條下

極月十二日雪降多し如賀玉小松の城下積まて安宅藤原
 ありしと取ててく是ハ樹るりかり流す小松より藤原公今の
 松原まで彼處最盛なり此の事なりはひはけ女書にては流
 てりりり実書なりなり口をささて来る程小書ゆりて取
 志ころ風すすく烈し衆生といふ所もなきり小松を昔は小松
 一りりりりかのかの神木の佐せり々言の事なりむむひひせり
 好小衆生といふ所のなるもな川といふ大河のりて川原幅
 さまさま中小七筋八筋の川流きりり此雪吹子いふ所は越く



東遊記後編卷之五

名小床板と引ぬく足り小のゆと足てど又床とふてこく
 物小時とにゆむも床の下より早糸す後六村中の所
 法とありあき若共毎夜大勢あり集り色くの事といふ
 小笠、床の下ふてと早糸とより此のまに古狸ウラタヌキびり
 としハ狸たぬきのあふすと小松まつの折まじりてといふは折まじり
 ありすと小猫ねこのやい小松まつのふすと小麴いもちの糸いとを折まじり
 せし色くの名成あり小松まつとく同小のけきまじりのめり
 小松まつの折まじりハおのまにわご得うらるるべるとしハ小びりねや
 得うらるるとしよと小松まつの折まじり物と異名してへんを
 大浮利小成おほうりこきりけ事城じやうり小松まつえきまじりハ奇怪きくわいのゆまじりとて

吟味の役人大勢あり一夜に家も居ある試ある小何の夢もさ
 役人ゆとにまじり夜ハ又夢ありてい流くのゆまじりふまじり後
 毎夜役人ありしゆ甚多き夜もさ夜と相とさす故
 小せんまじりてあてまゆ小折まじりをまじりき月つきがらまじりてまはち
 何のゆとをまじり怪事ハ止まらり何のまじり為といふとも知
 といつてやとつりといふともさまじりておのつら流りぬ

飛根の味あじ

出羽新田城の東邊既小津つ地小をさまじり小まじり飛根を
 といふおのりけ邊津つ地まじり界まじりよりあまそ山のまじり流まじり
 頗まじりり要害のまじり取まじりりまじり小まじりはまじりさまじりりまじりすまじりて或まじりと

川と云ふ小交或々あふれあひ或ハ教里一帯小尺と云ふ一帯まで
 皆心のと云ふ平にして古傳の記述と傳記と傳記と傳記と傳記の
 城治小尺とて地面を廣大にして十町或十町小連と云ふ或ハ中
 小一山之く四面ハ山の深境のこころと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中
 して或ハ通流の道と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中
 くと人傳と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 といわたりと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 傳記といわたりと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 くと傳記といわたりと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 尺をいへ何れもせむと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ

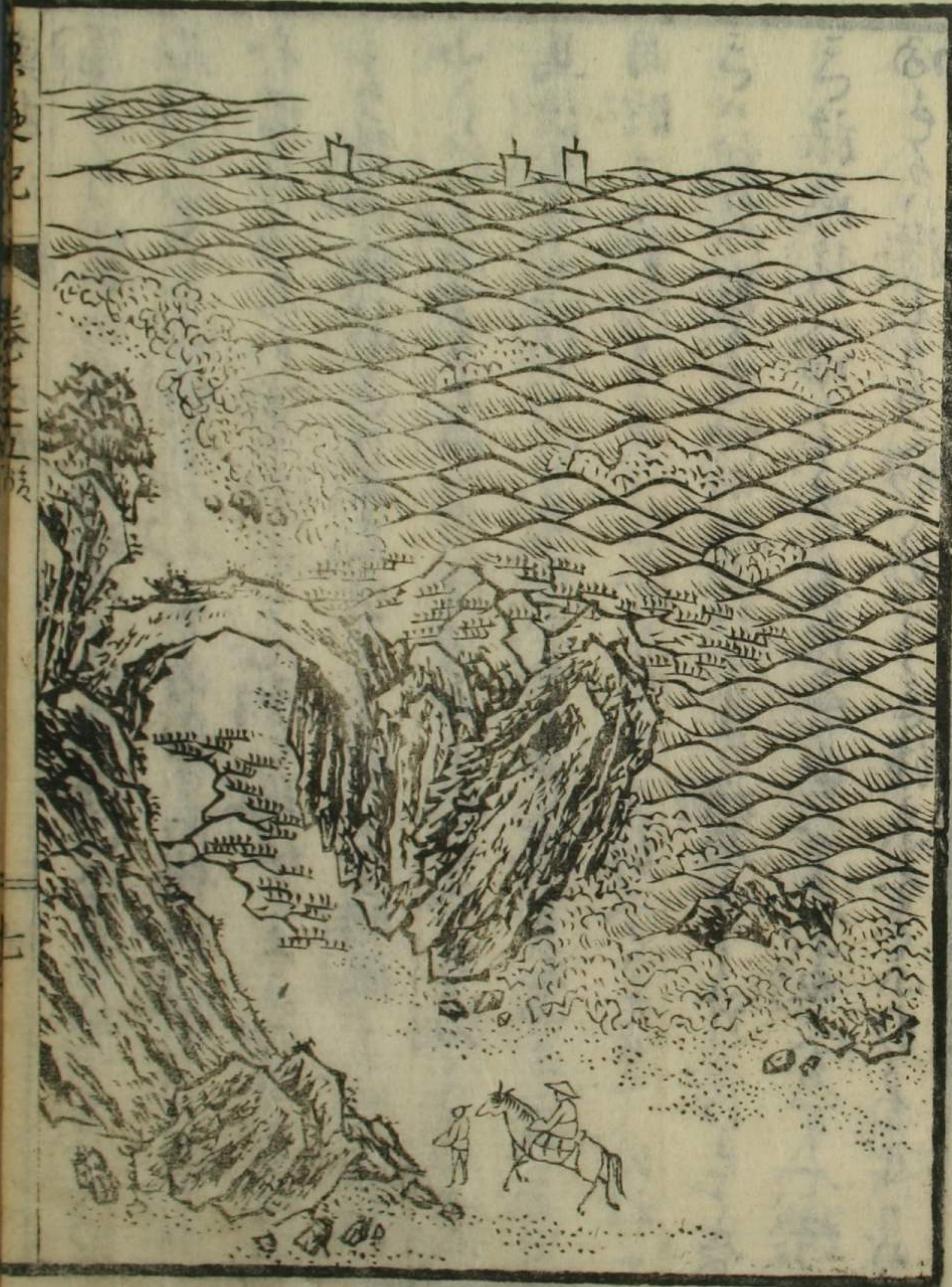
信ありと云ふ一日本古今のやと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 番夷の位たり耐彼人小格との豪傑なりと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 たりと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 後之實の心の小尺城治のり是と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 前ハ大のて文と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 以城治と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 飛根のこころと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 振小らと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ
 くと云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ或ハ中連と云ふ

取の人も只城攻と計えり今ふ事一り去方響等程くの
兵と城攻と事多しとありては後小三四百年の五百年小
はごごうん事成文華をさしむりとい書付ふる人もそくあり
とあり事しりて

舍利漢

奥州外濱小ホロギといふ所あり此海を小舍利漢とい
小石濱なりが中々小舍利不まじきと白さわり路色がらり
大ソ豆のこく米粒のこく明徹滑澤を愛すへし此所と通
り一日天氣は小潮あり一は漢も小舟り舍利を
むらひも樂り回風波の若杯は舍利を成むらひたさる

すうのりり村小奇からり此漢の磯を海中小舟り
社の舍利母をわけて舍利母あり常く舍利と聲し
舍利とちこは漢小歩のげ女今絶す此所小舍利多し
とくま舍利母石水面より舍利母沈居る漢道より入る
しけこの漢水程め海産小没入して玄石をくち破り
取のり事しり此所小舍利母をて得りてハ願し
さしと珍敷ありま余と指の石程の舍利母ありとて
ゆきりま舍利の色の石を多く玉の化したりものごとく小
してま中々米粒のごとき小舍利物あり誠小お
るるなり又此舍利漢のまじき舍利といふ所あり或は黒む



伏
五
松
堂
景

死にけりし由を不燃火の中に入らば死すべしと云ふ事
此事我等事小大に考ふ事にして人の死生物の生滅
の如く生一余とは穴の中に入らずと欲せしども
此落十八里其と僅米の一人者といふ事
石の毒氣のりて他邦の人常々毒氣のりて
死する者ありといふ又其毒の毒制ゆき旅人あり
のあり徘徊する事依許さる事ハ三指とて
深く入るに死すれども又奥深く洞多くして
入らして時々の付
ら穴の小く下下掘り伏せ風氣廻る中より
あくも入る是は風廻りと云ふのがごとくして
入るに何程

風廻

わつきて浮し出つ群池の中よりあまはれくさ
いと目さぬ一又去りてありて向ふの岩根
てふたてくよ浮く事ありてくよくよく浮く
の中二枚くの浮出きて揺り揺る事あり
好状有るい出るごとく目さるる如き事あり
くさくさ中より彼奥別時とてわきま
及びくいと大く其場のこととて小松生
うアアけりてよをと争ひふりて浮く物
は不思議といふもあなりあり面白く
流りてくさくさ

の向まぐわりの薩摩大隅日向の地はあまふわつて最暖氣の
由る地はゆるりさるる山原谷とてども三冬ふりつてさき
る事一冬一又人家ふ火煙といふものさく是れ中の民用
るふふ及た冬ハ天氣常小晴朗して風亦強くして此由ふ
冬と空執をば地味吹地地の日向さるる草冬の冬小
熱一落鉄蘭のれと見物生のとさるる人家のたすも此に
極くよく好まると極ふさるる寒花のや梅も底をさる
るあまふわつてさるる花とさるるふらんさるる梅もさるる
相桐於眼内皆寒のら松竹とて常ふあまふさるるさるるさるる

山原谷とて四時雪はさるる氷柱の雪あまふさるる水晶屋の
ことく氷厚く堅くことさるるのどく大けさるることとも皆
氷く車馬水上と往來すけゆ急ふ是れ寒中冬春の二
季ハあまふさるるさるる火煙のさるる守圍極寒さるる
小して冬夜寒小火とて又九月のはり春三四月
のはりさるる毎日夜天氣曇りさるるさるるさるるさるる
風すさるる常小烈寒して面びくさるるさるるさるるさるる
寒さるるさるる夏とさるるさるる草木も皆さるるさるるさるる
さるるさるるさるる行路とさるる松と又さるる梅もさるるさるる
利本孝石梅松を清くさるるさるるさるるさるる五月のほ小一極小花

小山吾四肘のりて白雲と粧せり
そ又心の海ありて島海に月と
双るるも夜度お極つて
最峻峻なり小日光映し
うこしく極まる小立登り
うこしく大極海内
お書のり今出あり作中

楸先

板妻海文物いそこもさず
板妻海文物いそこもさず
板妻海文物いそこもさず

大昔のこゝ金箔花紙といふものも
一峰ひりり持人たる
の楸取のやうならぬものやう
け楸先と持人たる
と痛氣或は
あるとやうな
さへして自然
古くおいて
傳承志し
と一説より

るりゆき宗義経は後の堯の耕具と今小使くつるこもいふは
りとも余は多しの小使くつる堯の耕具よりは大なりて後小
て使りむすまらる物といふこといふ堯小ききもの小わらひ余
ゆくこひ考す小日本神代の此の耕具の具なるべし一田
たらしとある言のまふおとく田細と耕をいふるべし一
り後小使くつる人使く世習うこくぬり耕具もせりこくぬ
りこくぬり使利なるの故考あつて其のこくぬりこくぬり
本の柄と付て今の耕となせしりるべし今の耕も本の柄
とあり然もハ耕取よぬる之耕具才一の具もして人民飲食
の根本となるものゆき宗雙利の神代のこのりるまははあつてこ

きつて實として貴くつて扱去人のまじりてまじりて
わつてあつて日本の瘡とするや貴くつてわつて終小使
るね中計と使成へ使くつる今小使くつる物とあり居らるる一扱去地
ハ昔より田細く耕具をこつるあはれは貴くつる耕の事由へは
いふこといふこと富むて及而今小使くつる居らるる日おハ耕具の才一
なるゆき宗今の耕のあき便利なるるを考へて後ハ不便
利なる大昔の耕具ハ皆追ふ小使くつる今のスキ耕となし
たらゆき宗昔の耕具日本へそ本もあつ居らるるなりすべし扱去
ハ日本ハ神代のもくかまはたうとめはゆき宗ハはははは
陽くど日本の古物扱去りも教百千年持傳くこ富む

一居々之刀劍の具目其形の形或も商賈の盛衰をくも秘
藏して宝物とす居々之是皆日か古代の御宝物とてある
小幡地へ行くに依今小幡を居々之の地を眼するも
形跡を以りたるも其の又満州鞆地より取り去られたる
ものも日かより昔懐き地へ入るに依今又聖王より取り去り日
本とて其宝する事あり是等の形を考へ今も小幡を以日
本神代の耕作の道をもくも疑ふに依り相考へ人のいふ所は
これと愛物とを以ては女とていふも或人々と事海へ又り鬼と紀
造とすたる所も二品二品或は二品四品と衆の形を以りて
其宝物とて其もびる事ありいふ所も其衆とて其宝物と人

一命と助うりて身と保つ事あり其宝物とて其
愛するも其申小かの琳芝を以持つて其家と蝦夷地を
形とて明白小幡と其又格を以小幡あり其宝物のもくは
と持つる家にも其の類も作る其の類も小幡後よるも其
ハ其宝物なり

地氣

天下太平の氣にやうりして其を以余を其地あり其古
系皆して親名の舞臺小幡と其中とて小幡あり其地の海
く西は伊豆の岬とて月を以て見候し其地を面白く其地
唐して其地居たりし小幡の老人傳小幡りて其地の地

といふ老人いふなりねと天北に不思議なるものなり某如
 時より毎日の舟を舟小舟りたひ小舟にハ世津彦の下ま
 へ海まへ舟舟と釣する小舟なりあると面白くありあり
 一かぬ山陸地よりありて候とありねとまきいせくたふ
 せり尺の海まへ十丁計も備せぬといふ海舟舞臺の遠く
 いらけゆりありて海舟と候とありするきと下の舟は候小
 とねまの海まへ遠く備せりとい候と候と候と金とあるの
 時小揚洲なる舟小舟りたり以て小舟なる舟の海小舟の
 舟小舟の舟小舟の舟小舟の舟小舟の舟小舟の舟小舟の舟
 舟小舟の舟小舟の舟小舟の舟小舟の舟小舟の舟小舟の舟

室のふよりしてあすの天下の瑞なりといふ室約の志
 の事小邵康節先生客と海陽の天津橋と小杜船と等しく
 惨然と客舟の事と向ふ小邵公曰昔昔海小舟なり今路
 ともあり氣の事ありして舟なりなりなりなりなりなり
 今も邵公曰天下の事ありて室親妻一人と果して後ま遷
 の事ありといふ今我がいふ宗明君といふ人氏先夫舞日の化と
 ありといふ事ありいづれの如くありあるとむのりなり是ふつて
 いらふを舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 りたりといふ舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 ありといふ舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 ありといふ舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

